



## P グリーン

- ・ 超速効性肥料調整剤
  - ・ チッ素過剰の改善に抜群の効果
- ※葉面散布でお使い下さい。

## 肥料調整は優秀花に直結。肥料調整と肥料除去の目的と使い方

一般的に使用されている肥料調整剤はリン酸とカリを主成分とした化学肥料です。これを水でうすめて使用しています。

しかし、この種の肥料調整剤で期待する効果が得られているかは非常に疑問です。

また「肥料調整は秋に行うもの」「そのように教わっているから」など使用目的が明確ではないように感じられます。

その為に肥料調整剤の選び方や使い方が十分に理解されていないように思います。

同じ肥料であってもチッ素系の生育を進める肥料より、少し軽く考えている部分があるかも知れません。肥料調整が短期間で効果を上げることができれば、追込み期間が長くとれ、さらに充実した“木づくり”ができ、その分大きな花を咲かせる土台ができる極めて効果的な肥料調整と言えます。

### 「肥料調整剤が効かない」「肥料調整がうまくできない」その訳

肥料調整の効かない理由のナンバーワンは製品の質によるところが大きいと考えます。

液体の肥料調整剤の主成分であるリン酸とカリはいずれも化学肥料です。

培養土に配合した赤玉土に含まれている鉄やアルミニウムにリン酸は吸着固定され、短時間のうちに「リン酸鉄やリン酸アルミニウム」に変化し、根の吸えない状態に変わってしまい、肥料調整剤としての効力は失われてしまいます。

これが一般的に使われている肥料調整剤の正体です。

粉状の肥料調整剤は原料は同じであっても特殊微生物により発酵することで、土中の鉄やアルミに吸着固定されない極めて効率よく効く、肥料調整剤に改善することができます。

化学肥料をそのまま使用すると、発酵した肥料調整剤を使用するのとは、その効果は決定的な違いがでます。これが根から吸わせるタイプの肥料の品質(すなわち実力)の差です。

どの製品を選び購入するかでほぼ決まってしまうのが肥料調整剤の本当の話です。

### 肥料調整の結果は良くも、悪くも、生長期の肥料管理の反映です

肥料調整が円滑に進められるかどうかは、肥料調整のみで決まるものではありません。

肥料調整に至るまでの「肥料の与え方」「培養土の作り方」「水掛け」などが深く関わってきます。

「腐葉土づくりで米ヌカを多量に入れた」「培養土を配合する時に乾燥肥料を入れた」このような場合は、よほど肥料の使い方を考えない限り、チッ素過多の生育をします。また肥料を与える上で、チッ素の多い肥

料を多く与えたり、多量に与えた場合は当然チッ素過多の生育をします。

さらに水掛けなどにより「根いたみや根ぐされ」が発生している場合はリン酸やカリの吸収が悪くなる為に肥料調整剤の効果はでにくい条件です。秋に夏のツケがまわってくる。こうした一連の管理の後始末の性格が強いのが肥料調整です。



### “あつさしらす” 生育状況

右の写真はサシ芽の水上げから10~15日間隔で使用しました。

5号鉢から鉢上げ 30日後の生育差です。栽培期間が長ければ差は大きくなると思われます。

- ※ 暑さで生育が悪くなってから使用したのでは差が見えにくいと考えます。  
“ころばぬ杖” 重要です。

- ※ 土や肥料に問題があれば、その結果が強く現れてしまいます。



土と肥料は同じ管理です。

## 肥料調整と肥料除去

肥料調整剤は、化学肥料であるリン酸とカリを水に溶かした液状の製品が菊づくりではよく使われています。

使用する時は水にうすめて使用します。

また原料は同じですが発酵することで吸収力や利用効率を高めた粉状のものもあります。

表土にバラまいて使用するのが一般的な使い方です。

発酵する時にリン酸を根に吸える形に分解する菌や有益微生物を使用している為、リン酸とともにこれらの有益微生物群が同時に施される為、根の活力アップが同時

に行われ、根の吸収力も高まり、より効果的に作用します（当社“P.Kマグ”がこのタイプの肥料調整剤です）

使用する時期は蕾が見えてからが主体となりますが、生長期においてもチッ素を多く吸い過ぎ「葉色が濃くなった」「葉のフチが波打ってきた」などチッ素過剰の症状が現れた時には速やかに使用することが大切です。

この状態を放置し、チッ素を“ため込んだ”まま、秋の肥料調整をしようとするとは簡単には改善ができなくなってしまいます。症状のできる限り初期に行うことが大切です。

## 秋の肥料調整

おすすめはP.Kマグ。過度のチッ素過剰となった場合は肥料除去と併用する。

止め肥、追い込み肥の後はチッ素過剰気味となっているのが普通です。

このチッ素分を消化させることで“充実した木づくり”ができます。

さらに花の肥大に必要な栄養分を蓄え、花形のよい優秀花を咲かせる為の肥料バランスを整えます。

この生育状態の変化は「濃い緑から淡い緑」に変わり「波打った葉のフチが素直に開く」などの変化となって現れます。

さらに上位の葉は大きくなり、幹は太くなってきます。

また、蕾の肥大とともに花首も太ってきます。

こうして開花の準備が整ってきます。

肥料調整剤は一度使用すればよいわけではなくチッ素過剰の状態が解消するまで使用します。最低でも2~3回使用することが必要です。

さらに「葉が巻き込んだり」「ドス黒い葉色になったり」など重度の症状の場合は、エストール又はランドライフで肥料除去後に肥料調整をすると効果的です。

この方法は生育途中で肥料の与え過ぎにより同じ状況に陥った場合は同様の方法で改善します。



葉っぱの状態をよく観察してください。

これ以上はチッ素を効かせたくない!! P.Kマグで調整を行える状態です。

正常生育状態



### 高肥効肥料調整剤

## PK+M (ピーケーマグ)

- 土に吸着固定されない高効率で最高の効きめの肥料調整剤
- 発酵することで根が吸いやすいリン酸に変わっています。



1kg入

チッ素 = 0%  
リン酸 = 12%  
カリ = 10%  
マグネシウム = 2%

秋の肥料調整及び生長期のチッ素過剰の改善に抜群の効果

### 超速効性液状肥料調整剤

## P.グリーン

今使ってほしい!  
チッ素過剰の  
強力改善

- 葉面散布で使い超速効性のリン酸肥料です。
- 秋の肥料調整、生長期のチッ素過剰症の短期解消に効果的



600g入

リン酸 = 23%  
カリ = 7%  
微量元素

- サシ芽から開花期までお使い下さい。

葉面散布でお使い下さい

鮮やかな発色を求めるなら“コクナール”がおすすめ

## 肥料除去という荒技

肥料除去の目的は、過肥栽培による肥料濃度障害の改善にあります。

また瞬時に除去できることも最重要です!!

肥料は与えれば、与えるほど良く育つものではありません。与え過ぎると逆に生育が悪くなってしまいます。(濃度障害) 定植時に一合～二合など多量の元肥を与える栽培をする方があります。鉢の中段に施す為、水を掛けると短時間で肥料が溶け出してしまい、肥料濃度障害が発生し生育不良に陥ることになります。

また定植時は適切な肥料の与え方であっても、追肥(液肥も含め)を与え過ぎ、チッ素過剰に陥ってしまうことが多々あります。こうした時は速やかに肥料濃度を下げないと生育不良はおろか、根いたみや根ぐされの発生をまねきます。

こうした状況を肥料濃度を下げ適正に戻すのが“肥料除去剤”(エヌトールやランドライフ)です。

(元肥に一合～二合など過剰な施肥は近年の夏の暑さを考えた場合、極めて厳しい栽培環境となる為、止めることをおすすめします)

## どんな時に肥料除去が必要か

秋の肥料調整においては「葉色が異常に濃い」「葉が巻き込んでいる」など過度のチッ素過剰となっている。この場合は茎葉にチッ素分をため込んでいるだけでなく、培養土にもチッ素分を多く含んでいます。肥料調整剤のみでチッ素分の消化を促しても、培養土にため込んでいるチッ素分を次々と吸い上げてくる為

に肥料調整は一向に進みません。

この状態の場合は先に培養土のチッ素分(肥料分)を除去した上で茎葉にため込んだチッ素分を、消化させる方が効率よく確実な肥料調整ができます。

生長期においても過度のチッ素過剰症がでた場合には同様の方法で解消し正常な状態に戻します。

## エヌトール及びランドライフで肥料除去をした場合は 後の手当も忘れずに

肥料除去剤で流し落とせる肥料成分は、チッ素、カリ、カルシウム、マグネシウム等、陽イオンと呼ばれる肥料成分です。

肥料除去をするとチッ素以外の必要な成分も一緒に流し落とすこととなります。

その為に必要な成分は肥料除去後に補給をしておくことが最重要です。

これらの成分は肥料調整剤(P.K. マグ)により補給することができます。

さらに「P.K. マグ」は茎葉に残っている未消化のチッ素分の消化と肥料除去後に残ったチッ素分も吸い上げ消化を促します。

こうして肥料除去は完了します。

※肥料は土と電気的に保持されている為、この結合を切り放し水を掛け鉢外に流し落とします。

結合を切り放すのがエヌトール及びランドライフの仕事です。鉢外に流し出すのは水掛けです。

ガンコな肥料残り一発解消

### エヌトール(ランドライフ)

最強!  
最適な  
資材

- 培養土にたまった肥料を瞬時に流し落とし、肥料濃度を最適化します。
- 秋の肥料調整の切り札



- 培養土のリフレッシュ
- 発根促進
- 根の活力向上

500倍で水でうすめて掛け流すだけで  
培養土の肥料除去ができる。

1kg入

※類似品があるようですが、性能は全く別物です。



機能性活力剤

### かがやき

イチオシ!!

- 菊が秋に最も必要とする肥料成分はカリです。カリを含み着蕾から開花期に特に効果的な活力剤です。



- 肥料の吸収を高めます。
- 肥料の利用効率が高まり、少ない肥料でよく効きます。肥料残りが起きにくくなります。
- チッ素過剰になりにくく美しい姿で育ちます。

特に秋に使うと効果的です。

1kg入

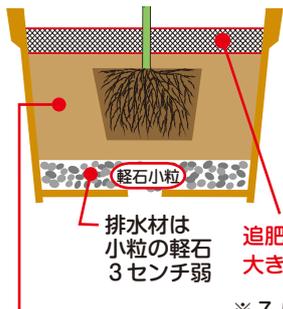
※この種の活力剤は他社では発売されていません。

他社には  
無い!



「根つくり」の失敗は定植後に挽回することは難しい

植え方の説明  
5号鉢



鉢は小さめに使っている。土も少なめ。

排水材は小粒の軽石 3センチ弱  
追肥と増し土スペースに大きめにあげた。

※7.5センチポットでの挿し芽であり、発根状態は良好であった。

菊つくりでは蕾のつく時期はほぼ決まっている為、木を育てられるのはそこまでです。よって苗つくりに失敗することは、充実した立派な木つくりはできないと言うことです。

今回は実際に起きたことを紹介いたします。事の発端は鉢上げ時に、軽石の小粒を排水材に使用した事です。(通常は5号鉢には排水材は使用しない、これは正常な根張りであった。) さらに日照不足が予想された為に多めに入れたことです。しかも根つくりを確実にする為に土を少なめとし、追肥の際、増し土をする計画でした。

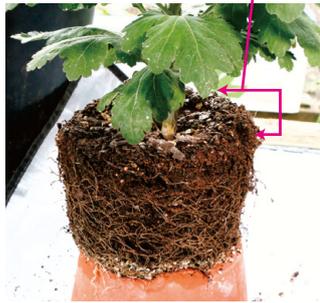
ところが生育が悪い、摘芯後の三枝の伸びが悪い、その結果定植が3~4週間遅れてしまいました。「日照不足にしてもこれは変だ」何か問題があると思いつつ定植をすることにしました。(本来なら使えない苗ですが、今年は、あまりにも伸びが悪い、この種の問い合わせが多く、結果が見たかった)

今回の問題は「5号鉢」「小粒の軽石」「培養土に対して多めの排水材」の条件で発生。直接的な原因は水不足か??

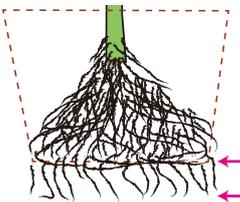
抜いてビックリの変な根張り

鉢から抜いて見ると表土近くには根は少ない。排水材とその上数センチの部分に根が集中している。幹を持ち上げると表土がバラけて割れてくずれてしまう。しっかり根が張っているのは鉢土の下部半分以下です。この根の状態では定植は8月中旬以後になってしまう。

土の色の濃い部分は根が少ない



こんな感じの根張り



軽石部分の根5~6センチ

定植から約2週間後の残った鉢の根張り

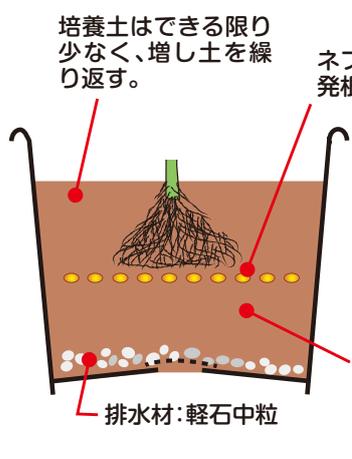


垂れ下がった白い根は軽石の中に伸びていた根です。根鉢を持ち上げた時に軽石はバラけて落ちた。

通常軽石は空気の層を保つものと理解されてます。ところが今回の場合は水を保つ働きをしています(軽石は多孔質であり、量が増すと保水力が意外に大きくなる)

その為、表面は水不足でも下部は十分な水分がある為に萎れない。これにだまされる(軽石以外の材料でも起こりえる為、細かなものは使用しない方が良くもかもしれません)中粒の軽石を使用すれば、問題は起きません。排水材は中粒がおすすめです。

こんな考え方をしました。



8月5日定植

現在の生育状況



9月10日撮影  
・背丈は約65センチ  
・蕾は見えていない。

**リン酸の使い方の常識**

昔から農業の常識として「リン酸は有機物に包んで施せ」というのがあります。リン酸はそのまま施すと土中の鉄やアルミと結合して根(植物)が利用することのできないリン酸(リン酸鉄やリン酸アルミニウム)に変わってしまう為です。そこで堆肥に混ぜ合わせ、「堆肥すなわち有機物に包んで土と直接接触ないように施す」こうしてリン酸の効きめを高めてきました。リン酸を裸で施すより有機物に包んで施すことが効果が高いことを経験的に知っていたからです。

お申込み・お問い合わせは

ウチダケミカルコーポレイション

Tel.029-869-1777 Fax.029-869-1666

〒300-4204 茨城県つくば市作谷1711-12 郵便振替 00820-6-96628